

## 「自分の老後について」

3年 T.K

みなさんは、自分の老後について考えたことはありますか？もう少し詳しく言えば、自分の身体が不自由になった時のことを考えたことはありますか？遠い先のことすぎて私には全く想像がつかないことでしたが、不意に出た父の言葉が、私の中で一気に現実味を帯びさせたのを覚えています。父は「最近老眼になってきたけれど、色々物の見え方がこれから変わっていくのは、少し楽しみだ。」と言ったのです。それは今まで私にはなかった発想だったので、理解できなかったのと同時に、身近に「老化」を感じさせられました。

そこで、五十年後に自分が不自由を感じ始めたとして設定して考えてみました。まず目に関して私は元から目が悪いせいもありますが、メガネや虫メガネなど、視力は簡単に対処ができると思います。しかし足が不自由になることはもちろんメリットなどなく、どうしても若いころのように走ったりできなくなるのは当たり前で、だからといってそれを補うためにたくさんの手術を重ねてまで回復したいか、と言われると少し迷いました。よく私の祖母は「足が痛くて大変なのよ。あなたみたいに楽に歩けたらいいのに。」と言っていました。しかし、仮に手術をして楽になったとしても、無理にヒトの老化を妨げているため多少の違和感もあるはずで、相応のメリットがあるとは感じられませんでした。それでは、どのように老化を補うことができるでしょうか。

日本は特に医療の技術が高く、平安時代ごろには病気を含め四十代で亡くなるのが普通でしたが、今では平均でも九十代近くまで生きられるようになりました。それは薬の効果ももちろんですが、手術をすることで悪い部分をとったり、交換ができるようになったことが大きいと言えます。確かに、がんができたら取り除くことは必要だとは思いますが、年をとったから人工の心臓と交換する、皮膚を変える、などしたら限度なく生きられるようになってしまいそうで、正直すごく怖いのです。自分が仮に事故に遭って植物人間状態になって機械に頼らないと生きられなくなったとしても、自分の力で生きるのではなく、死ぬことを無理に先のばしにするようなことはしたくないです。

このため私は手術が必ずしも良い手段だとは思えません。また、いつまでも若くて健康な身体を保つことだけが良いとも思いません。

私がそう考え始めたきっかけは、小学生のころに、パラリンピックの水泳選手とコーチのドキュメンタリー映像を目にしたことです。その選手は目が見えないというハンディキャップがあったからこそ、努力を続けることができた、とおっしゃっていました。練習する時はコーチが必要不可欠で、フォームやタイムなど、選手の把握できない部分をフォローしているため、不自由な割に不安が少ないとおっしゃっていたのがとても印象的でした。そのドキュメンタリー映像を見て、自分の不足している部分を必ずしも一人で補わなくても良いと思えるようになりました。身体に不自由があっても手術で完全に治してしまうことも一つの手段ですが、発想を変えると、足りない点を優れた人と協力し合うことも、補う手段の一つだと思います。足りない点はその人の個性でもあり、無くしてしまうのも、活かすのも個人の選択です。

「足りない」ことは、老化に限らずコンプレックスでもあり、勉強や部活で考えると数え切れませんが、それを強みに変えていきたいです。